

# 公経と義満

文化情報学部教授

鋤 柄 俊 夫

皆さん、こんにちは。この10年間は、世界も日本もそうでしたが、同志社大学と京都の歴史にとって激動の時代でした。新しい学部がいくつもでき、文学部などの京田辺校地から今出川校地への移転計画が進み、その度に大きな発掘が行われました。私は、それらの大きな発掘に、歴史資料館スタッフとしてまた、文化情報学部スタッフとして直接関わってまいりました。そして京都の歴史にいくつかの新しい見方を提示してきました。そこで本日は、その成果をまとめることによって、同志社大学のある場所がどのような場所であったかについて、寒梅館の調査と去年の調査とまとめてお話をさせていただきたいと思えます。

今日お話する時代は、同志社大学の発掘調査で見えてきた京都の鎌倉時代から戦国時代までの歴史ですが、鎌倉時代、室町時代、戦国時代で3つの大きな発見がありました。それがどこで見つかったのか。何が見つかったのか、それに関係する人物が誰か。そしてその人物と発見をつなげた結果、どのようなことが言えるかという形でお話しさせていただければと思います。

最初の発見は、これまであまり京都の歴史のなかで注目されてこなかった鎌倉時代の姿です。

発掘が行われた場所は図1の①、②、⑤の写真になります。①と②が新町キャンパス、⑤は寒梅館です。何

がみつかったかというところ、鎌倉時代の溝が見つかりました。どんな溝かというところ、①、②、⑤が一直線につながる東西方向の溝でした。これは何かというと、①、②の北側に持明院という文字があります。これは鎌倉時代に後鳥羽上皇の兄にあたる後高倉院が住んだ院の御所で、南北朝時代には北朝の拠点になった重要な施設です。今回、鎌倉時代の発掘調査で見つかった溝は、この鎌倉時代の重要施設だった持明院御所に面する東西方向のメインストロートの脇にあった溝でした。さらに持明院大路と呼ばれるように、通りに大路名がつけられるのは平安京の外では少なく、この地区が京都の中でも特別な場所だったことを意味します。それは、この通りに面して持明院御所という重要な施設があったことに加え、鎌倉時代の京都の最高権力者だった人物がこの持明院大路の近くに、関連する人々を集めて住んでいたことによります。

その人物が西園寺公経です。これまで鎌倉時代の京都については首都が鎌倉に移ったために、その前後の時代に比べてあまり研究がされていませんでした。この人物も鎌倉の史料に埋没され、あまり注目されていませんでした。しかし今回の発掘調査により、西園寺公経が、鎌倉側にも天皇側にも深い関係を持つ非常に重要な人物であったとして改めて確認され、鎌倉時代の京都の中心が、実は同志社大学の周辺だったという新しい視点で注目されることになりました。

続きまして室町時代の大きな発見があった場所は、昨年発掘いたしました同志社中学校のグラウンド地点です。写真は⑧、⑨、⑩、下の黒い⑪番、⑫、⑬の下の⑭番になります。このうち⑧、⑨、⑩は溝と堀です。この場所は日本の中世において最も大きな戦乱となった応仁の乱の中心地でした。その結果、京都のいたるところは、応仁の乱によって焼け野原になったと考えられてきました。ただし、焼け野原の痕跡は、これまでの発掘調査でほとんど見つかっていませんでした。そのため、京都を発掘調査している関係者たちは、応仁の乱の

実態について大いに頭を悩ましてきました。けれども今回の調査で、大型の溝や濠が複数見つかって、それが応仁の乱と戦国の時期だということも立証されました。これらはもちろん激しい戦闘に関わる施設になります。さらに、それがこのように近い場所で複数見つかったということは、応仁の乱が京都の歴史においても、日本の歴史においても、大変な戦乱の時代だったということを確認させてくれた証拠になります。

これに加えてもう一つわかったことがあります。この場所がそもそもどういう場所であったかという点、現在同志社大学の北側に相国寺があるように、もともとは相国寺の境内地でした。その境内地が、どのように移り変わっていったかということも、今回の調査でわかってきました。一つの大きな発見は⑫番の写真で、これは柱の基礎固めです。相国寺には現在も多くの塔頭がありますが、この柱の基礎は、今は失われていますが、戦国時代にこの場所にあった塔頭の建物の痕跡になります。建物の規模も大きなものと推定できています。応仁の乱前後における相国寺の境内の変遷が、ここで確認されたことになります。

もう一つ注目される発見が黒⑪番です。すでに現地説明会でごらんになった方もおられると思いますが、底の中央に「鹿」と墨で描かれた瀬戸の焼きものです。この鹿という文字が何なのかという点、最も可能性の高いのが、相国寺の塔頭の中で足利義満に縁の深い鹿苑院です。この塔頭が相国寺をはじめとする五山文化の最も重要な要素としてさまざまな影響を及ぼしました。ところがこの鹿苑院が実際にどこにあったのかは、これまではっきりしていませんでした。今回これが見つかったことにより、同志社中学校グラウンド地点の周辺にそれがあつただろうということが、推定できることになりました。これも新しい発見になります。

花の御所に住み、現在の金閣寺につながる北山殿を造営し、国王をめざしたとも言われる足利義満ですが、その実像はあまりよくわかっていませんでした。花の御所といえは、有名な「洛中洛外図」に足利義満の花の

御所にちなむ公方の館が描かれています。それは第12代將軍の義晴のもので、その意味で、今回鹿苑院に關係する資料が発見されたことにより、初めて足利義満の実態に一步足を踏み入れることができたのではないかと思っております。

ということで室町時代は、同志社大学の発掘調査の成果により、応仁の乱の実態、中世相国寺の広大な境内の変遷、そして足利義満の実態に迫るような発見を得ることができたといつてよろしいかと思つてます。なお、現在通り名として知られている今出川と思われる鎌倉時代の姿が見つかったことも、この時代のトピックになります。

最後が戦国時代です。關係する写真は⑤番の上。④番、そして⑥番。場所は現在の寒梅館が建っている敷地の北端とほぼ中程になります。北端から見つかった遺跡が④番と⑤番。現在、寒梅館の東北のカフェテリアを出られますとガラスでできたピラミッドのような施設があります。それを覗いていただくと実物を見ることが出来ます。その場所から直径15センチくらいの石が敷き並べてあるものが見つかりました。それが⑤の上です。

⑥は現在埋めてしまつて見ることはできませんが、柱の跡です。この石敷と柱が、戦国時代の京都を描いた「洛中洛外図」と關係していたのです。図2の中で石敷がA地点、柱穴がB地点です。見つかった石敷きと柱穴の年代は、16世紀中頃だと考えており、それが、上杉本「洛中洛外図」に描かれている京都の年代と対応します。そこで上杉本「洛中洛外図」と見つかった場所を照らし合わせてみますと、位置關係がそれぞれA地点とB地点にあたることになり、A地点は、第12代將軍足利義晴の邸宅の北東隅に置かれた鎮守の社、吉田神社から勧請された社になります。B地点はこの邸宅の中で地域を区切つたL型の板塀になります。それが見つかった柱穴にほぼ対応するだろうといつて、寒梅館の調査の時、その場所が第12代將軍足利義晴の築い

た、かつての室町殿の跡につくられた室町幕府だろうと考えて、現在のような展示施設を整備いたしました。

このように、寒梅館地点の発掘調査成果をふまえて戦国時代の同志社大学周辺の様子を想像してみると、その頃の京都の様子を描いた「上杉本洛中洛外図」と同じような風景が今出川通の周辺にひろがっていた可能性が考えられることとなります。そこであらためて「洛中洛外図」を見直してみると、寒梅館の場所には室町幕府である公方の館があり、その東側には、今出川キャンパスと相国寺があります。さらに公方の館の奥をみると近衛殿として藤原氏の筆頭である近衛家の別邸が描かれています。洛中洛外図では奥が西になりますから、近衛殿は、同志社大学の新町キャンパスにあたることがわかります。そうすると室町時代から戦国時代のこのあたりは、近衛家、足利家、相国寺といった当時の最高権力者の施設が集中した場所だったことになり、同志社大学は、それらの施設の跡を、新町、室町、今出川の3つのキャンパスにしていることとなります。さらに時代をさかのほれば、鎌倉時代の公家政権の中心もここにありました。また近代の扉を開いた薩摩と長州の話し合いが行われたのがこの地であることは、みなさんもよくご存知かと思えます。

今出川校地に関係する10年間の発掘調査を終えて今思うことは、新島襄が同志社大学をおいたこの地には、そういった日本を動かす強い力があつたのではないかということです。

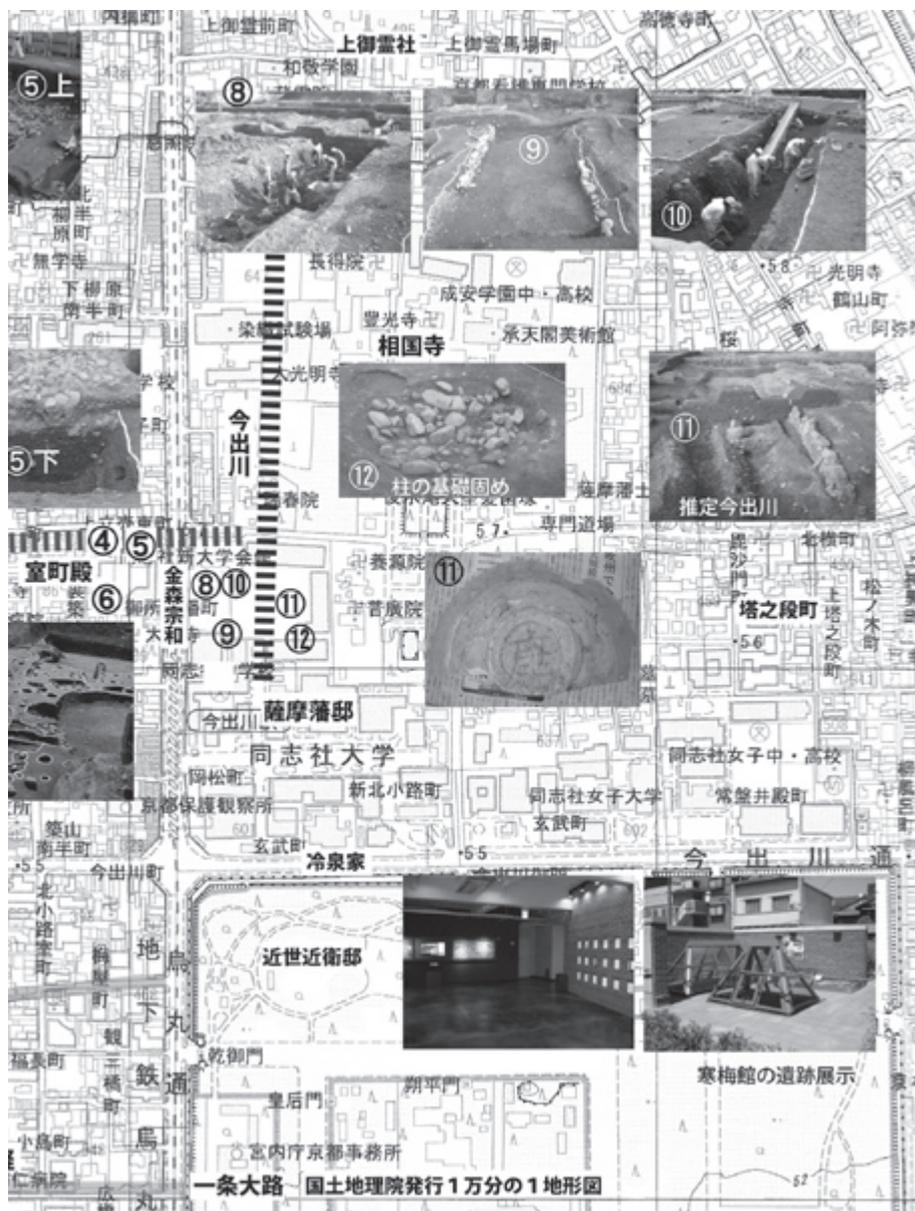
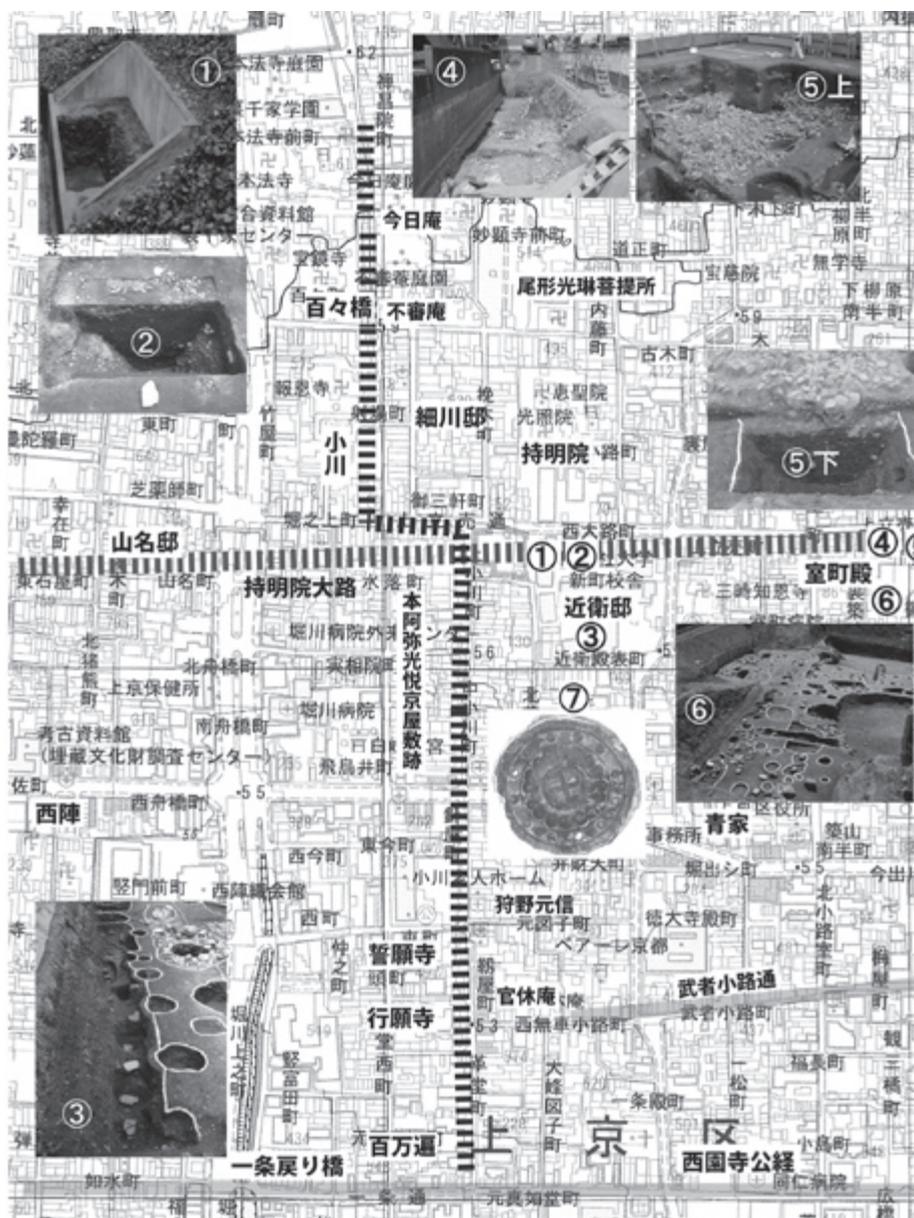


図1 今出川校地の発掘調査



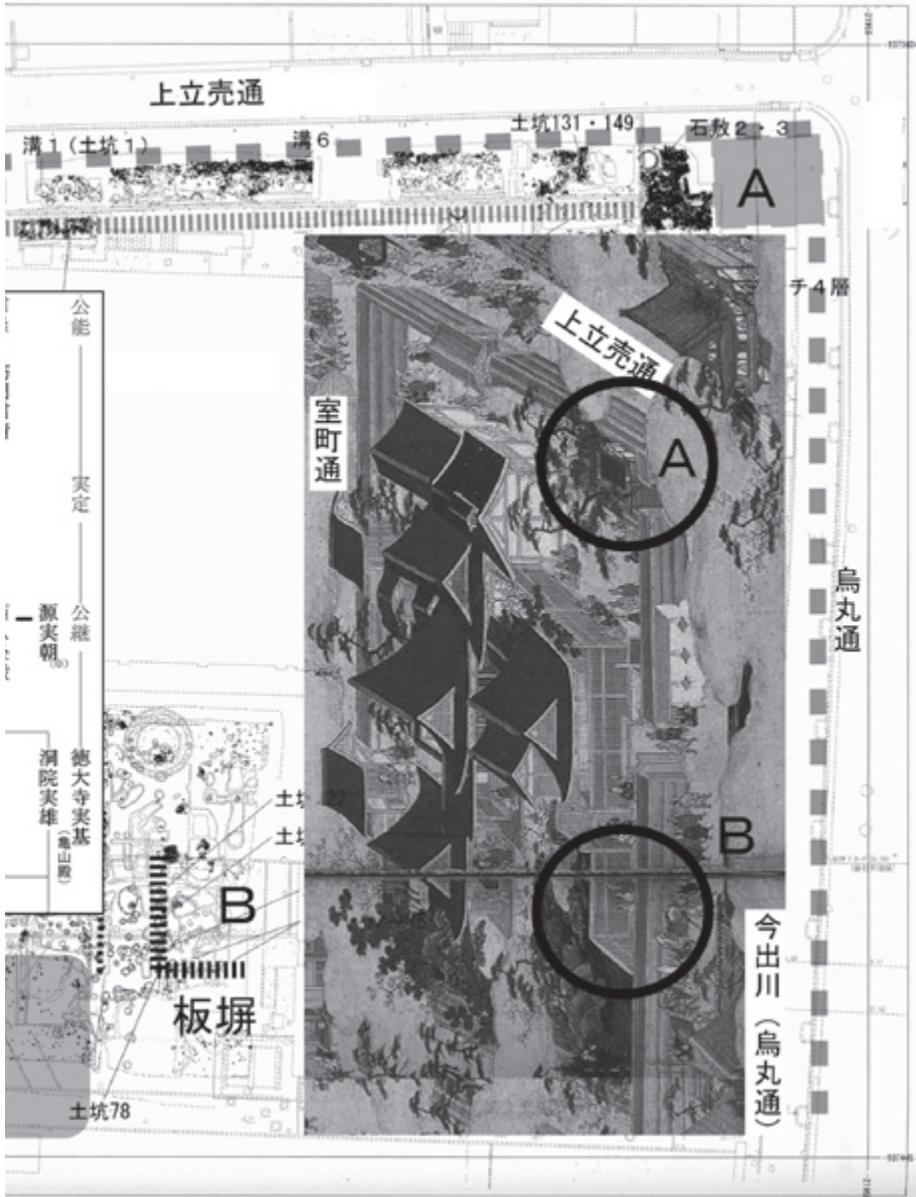


図2 寒梅館地点の発掘調査 上杉本洛中洛外図屏風(米沢市所蔵)

